

## 茶道と通過儀礼

劉 偉<sup>1</sup>

### 要旨

茶道は日本の伝統文化を代表し、日常的な空間と異なり、美を溢れさせる特定の空間で儀式な点前を行い、茶会という形で客人をもてなす点前である。本稿は、筆者自身自身の稽古から茶会まで参与してきた経験（フィールドワーク）を踏まえ、また、人類学者ファン・ヘネップ氏の「通過儀礼」視点に基づき、関連文献を検討した上での試みである。即ち、自分自身の茶道経験、茶会の開催、茶道の稽古内容、稽古の空間、そしてその空間で習うことを、参与していたすべての人々にとっての通過儀礼とし、その通過的なプロセスがもつ意義を究明してみたいものである。

キーワード：茶道；通過儀礼；非日常性；日常性；茶会

### I. はじめに

日本における茶道の研究には、歴史、哲学の視点にもとづく研究がよくなされるが、文化人類学の視点にもとづく研究は管見のかぎり見当たらない。その原因を、筆者は以下のように考える。まず、茶道を対象として研究を行う場合には、茶道について基本的な知識がなければ、その研究は容易にはできない点にある。例えば、茶道の世界では客として茶を飲むだけでもある程度の知識が必要とされる。また、日本の伝統文化は稽古する頻度（月3回ほど）から見ると、長い時間を必要とする。さらに、茶道は資料に基づく研究よりも実践することが中心になっているため、日本茶道の稽古や茶会の内容に具体的に迫る研究が見当たらない大きな原因と考えられる。

そこで本稿では、筆者が茶道経験者としての観察に基づいて、現代社会における伝統文化を代表する茶道が、日常生活の中で重要な

位置を付けにあることを明らかにすることを目的とした。茶道研究者の谷川は茶道がもつ意味について「茶道は、身体の所作を媒介とする演出の芸術としての茶、社交的なもの、修行的なもの、芸術的なもの、儀式的なもの」<sup>2</sup>と説明している。すると、茶道には芸術の面、社交の面、修行の面、儀式的面の機能を含めた日本を代表とする社会文化の視点にもとづく研究が必要であると考えられる。

また、茶道を対象とした研究は、日本社会、日本人の人間関係のあり方に対する理解、茶道における日本人の礼儀作法に対する考え方の一面として見る必要もあると考えられる。本稿では、人類学者のファン・ヘネップ氏の『通過儀礼』に関する論点に基づいて、茶道の稽古・茶会が持つ通過儀礼的な側面の観察を試みる。ファン・ヘネップ氏によれば、通過儀礼とは「ある集団から他の集団へ、またあるステータスから次のステータスへ、次から次へとなぜ移って行かなければならないのか」ということは、「生きる」という事実その

ものから来るのである」<sup>3</sup>と定義される。その通過は、一連の階梯を区切りするための儀式が存在する。そして「個人をある特定のステータスから別の、やはり特定のステータスへと通過させることに目的がある」<sup>4</sup>。「通過儀礼の完全な図式には理論的に境界前(分離)、境界上(過渡)、境界後(統合)の儀礼を含んでいる」<sup>5</sup>。

本稿に於いては、筆者自身の長年の茶道経験を通して得た、学習者の立場とともに、茶会に参加する立場、茶会を催す立場を経た過程が、ファン・ヘネップ氏の言う通過儀礼に該当するものと捉えて考察するものである。また、人類文化学の視点から、茶道の稽古内容、茶会に参加すること、茶会を催すことの3点が現代日本人にとって如何なる意味をもつのか、そして茶道を習う意義について究明してみたい。

## II. 茶道と稽古

茶道とは、江戸時代から使われてきた言葉であり、元々は「茶の湯」という言い方である。熊倉は、「茶道という言葉は茶の湯の方が古く、茶道が今日的な用語として用いられたのは十七世紀の初頭ではないかと思われる(千道安の道歌は古い例であろう)」<sup>6</sup>と述べている。また、堀田により、「お茶本来の茶の湯とは、もともと別の意味を持つものがあります。稽古というのは茶の湯を行うための素養を身につける手段ということが出来ます」<sup>7</sup>と述べている。日本では、伝統文化は、師匠に従って身体を修練することは、稽古という。日本伝統文化の茶道、華道、書道などは、稽古という言葉が使われる。また、修練する場所は、稽古場という。ここで、なぜ日本伝統文化を習うことは稽古という言葉を用いるのか。国語辞書には、以下のように記されている<sup>8</sup>。

- ① [昔のことを手本にし参考にする意] 学問・技術を習うこと。[狭義では、武術や芸能などを習うことを指す]<sup>9</sup>。
- ② 古の道をかんがへる。[書、堯典]曰若二稽古-帝堯<sup>10</sup>。
- ③ 古道を考える。[書、堯典]曰若ここに古の帝堯を稽(かんがふ)<sup>11</sup>。

以上のことから、稽古とは、古いものを考えながら習うことであることがわかる。南谷直利、北野与一たちは、「稽古は、「繰り返し学ぶ・習い・練る」の意で、学問や武芸にとどまらず、宗教や芸能等の多様な分野において慣用されていったのである」<sup>12</sup>と述べる。

また、茶道の師匠堀内は、「けいこは、茶の湯で行われる点前を実行するため、頭で覚えてできるからそれでよいということではないのであります、その基本的な点前を繰り返し繰り返し行うことで、目をつぶってでもできるまでにし、さらに繰り返し繰り返し実行することによって、目に見えない何ものかを身に蓄積していくことになるのであります、これが稽古の意味と言えますという」<sup>13</sup>と述べている。

以上の引用からまとめると、稽古とは、身体で実践し、経験することにより、習慣となるまで身体を修練することである。さらに、井伊は「茶道は、書をもて伝ふ可きにあらざ」<sup>14</sup>という。井伊によれば、茶道は書籍から習うものではない。茶道の組織制度から見ると、茶道は、身体への経験的な伝達が多く、教授は弟子の成熟度に応じて段階的、計画的な情報の伝達を行うのである。筆者自身が経験した稽古から振り返ると、稽古の内容は身体を修練を中心に行うものであった。指導者の先生からは、「頭で覚えるものではなく、体で覚えましょう」とよく教えられた。例えば、炭点前をするときには、火箸を握る手は、必ず手の甲(手の表)を客に見せる。手の平(手の裏)をみせてはいけないため、火箸で

炭を挟むとき置く位置をかんがえないと、手の平をみせてしまうことになるため、初心者が稽古をするときには、よく何人もの生徒が集まって、手の動きについて話し合うことがある。指導者の先生は、このような光景を目にすると、「体を任せてください。頭で覚えたら、もっとややこしくなるから」と注意を促す。つまり、稽古は身体に対しての訓練であり、修練の数をかさねて身につけるものでもある。いわば、体で動作を覚えるものである。練習によって自然とバランスを取れた運転ができるようになる自転車と同じである。

茶道の稽古の仕組みから稽古する頻度を考えると、大体週1回、月3回稽古が一般的である。学校の仕組みと違い、集中コースではなく、長く時間をかけて習得するものである。茶道の世界では、師匠の元でなん十年間も稽古を続けることはごく普通なことである。茶道の世界では「スタートはあるが、ゴールはない」という言葉がよく耳にする。日々を繰り返す稽古が当たり前の世界なのである。井口は、「お点前の所作の中には、日常の起居動作に応用していいことが数々ある」<sup>15</sup>と述べている。稽古の繰り返すにより体の動きが習慣になるのである。稽古した結果とは、演出よりも自然に美しい動作ができるようになることである。稽古の仕組みと稽古頻度からみると、集中的に稽古するのではなくて、習慣付けやすく時間的に分断して、忘れるようなときにもう一回復習するというタイミング設定で、それを何十年の繰り返すことにより、自然に美しい動きになってくるのである。

### Ⅲ. 茶道の非日常性と日常性

日本茶道は非日常性をもっているのが周知なことであろう。まず、稽古場は非日常性がある。茶道の稽古は茶室で行うのが基本であり、茶室、露地、茶室に飾られた美術品、

喫茶の手続きに使われた茶道具どちらでも常に新しく創造されたものである。日常的な空間と異なり、美を溢れさせる空間であるため、非日常性を持っている印象を与える。季節に合わせる茶花、掛け軸、茶道具や、美しく季節感が溢れる菓子を用意するという完璧な空間にする目的とは、人間はこのような空間に身に置くと自然と心が静かになり、真面目に自分の動作に集中できるためと考えられる。

茶道を習い人間にとっては、日常空間から非日常空間に移転する意味がある。「純」な世界で自己を探求し続けることである。田中は「客が茶席の中に入り終わると、最後にはいった末客は躡口をしめ、掛金を掛ける。こうして、茶席は離俗的な美を追求する空間となるのである」<sup>16</sup>とのべる。俗な空間から聖な空間に移動して、精神的に切り替えるという意味である。普段の稽古場、茶会の茶席と異なるが、その茶室に入る前の扉は茶席の躡口のような存在である。ここで、一礼をして入るのが、日常空間から切り離し、非日常空間に入る行動となる。先述した田中ののべる通り、その一枚扉を入れれば離俗的な美の空間となるのである。離俗的な空間で点前すること、あるいは客として点前をいただくことは、どちらでも日常空間をはなれた非日常空間となり、記憶に長くとどめられることができることである。例えば、成人式の通過儀礼は、当時者にとって人生で一度きりの出来事であり、彼らの記憶に長くとどめられる。それは非日常空間で稽古をさせている目的の1つとも考えられる。

人類学学者 V・ターナー氏によれば、通過儀礼を体験する通過者は、社会から分離された境界領域にある場合には日常的な社会規範したがう必要はなく、いわば社会の日常的構造や規範からはみ出た状態におかれる。いわば、「純」な状況に自らを置き、普段の社会的地位にかかわりなく、また日常的な約束事

や役割期待から離れて自由の状態になる。V・ターナー氏はこの状態を「コミュニタス」と呼ぶ。茶道は自己にこの「純」な状態に置く。

「純」の世界にいれば集中力も高まり、「純」の空間で稽古をすることによって、自らを“再発見”し、不完全な自己を認識することができる。そして、その日常的な空間に動作を一つずつ完璧にさせていく。あるいは、人間は完全な非日常空間に身をおくと、自分の不完全なところが明らかとなるように。茶室に入ったら、自分を再発見する状態となるといえる。また、その空間で完璧な自分と美しい動作を求める。今日よりもよい自分を追求することを求めるのである。

また、井口氏は、「動作を完璧にすることが不可能だというまさにこの事実が、茶道の精神鍛錬にもしているのである。身体の動きの至らなさを、練習不足の見ならず、集中力や落ち着きの欠如といった精神的な至らなさに帰して反省することが求めてられる」<sup>17</sup>と述べている。なお、嶋根氏によれば、「儀礼的行動という社会的行為の外見だけではなく、行為そのものを支える何ものかを、個人と社会の内面奥深くで組み換えてしまう。通過儀礼は外見的には集団所属、年齢階梯、空間、時間、身分の移行として捉えられるが、もっとも重要な要素はそこを通過することによって生じる精神的な変貌なのである」<sup>18</sup>と述べている。このように、茶道は日常から非日常通過して、そして日々の稽古経験を経て自然に日常生活に身につけたことと融合することになる。すなわち、茶道は、日常空間から非日常空間を通過して、また日常空間に戻る循環的な行為として捉えられるのである。

#### IV. 通過儀礼とする茶道

茶道とは稽古で点前を積み重ねて、茶会、茶事を行なうことである。稽古は茶道の習う

段階であり、茶会は日々の稽古の結晶とも言える。茶会や茶事とは、いわば普段の稽古を経て得た知恵をまとめて表現する場である。それはある意味では、点前を“生”から“熟”過程でもあるといえよう。茶会を催す立場、茶会を招待された立場から見ると、茶会は普段の稽古の実践ともいえる。茶会を利用して普段の稽古の成果を試し、その不完全なところを発見し、次の稽古に活かして完全な形態へと近づかせる。本節では、稽古から茶会までの通過を、ファン・ヘネップ氏の「通過儀礼」理論で茶道を分析してみたい。特に、茶道とはなんか。何の為に習うのか、茶会あるいは茶事を行うわけなどの問題を分析してみたい。

稽古、茶会、茶事などは非日常空間における行為である。その非日常空間は“茶室”と言う。茶室に入る前に露地を通過することがある。露地は日常空間と非日常空間分離する“門”でもある。ここでファン・ヘネップ氏の「通過儀礼」理論を使って茶道を分析しよう。稽古では、まず日常空間から分離することから始まる。この段階は境界前（分離）に当たる。続き稽古を行う段階は、境界上（過渡）にあたると、茶会や茶事は境界後（統合）に当たると考えられる。普段な生活や仕事などの空間から抜け出して、普段と異なる空間に入る。精神的、心理的にも整理して清めて、“聖”の空間に入る前の準備段階とも言える。このように日常生活から離れて、非日常空間で稽古したり、茶会や茶事をしたりすることは、ファン・ヘネップ氏の「通過儀礼」に当たる。続いてもっと細かくみてみよう。境界前（分離）に当たる稽古の手順を分析してみよう。茶道を習うことは、入門してから、点前を行う前に、割り稽古から習い始める、もちろん、茶室に入る前に時点で、畳の上を歩き方、水屋の準備など、用意段階もある。そして、茶室に入る、客の役割を習う段階にな

る。習う内容は、茶菓子、茶をいただき礼儀と道具を尋ねる礼儀、そしてそれぞれの客と亭主のタイミングを見ながら習う手順がそれである。それができるようになると、亭主の役割を習う段階になる。つまり、普段の稽古段階でも、ファン・ヘネップの通過儀礼の図式理論に一致する。割稽古の段階は境界前(分離)に当たる、用意段階は境界上(過渡)に当たる、客の役割と亭主の役割を習う段階は境界後(統合)に当たる。それはある意味では、稽古する人間が点前を“生”から“熟”させる過程でもあるといえよう。

そして茶会の手順を分析してみよう。筆者の経験によるおよそ茶会一ヶ月前から準備始めている。茶会を催す時、担当者が全ての道具、必要な物を用意する準備期間である。担当者が茶会の規模とレベルによって、備える道具など決める。そのため、茶会のレベルは道具の質によりわかり、道具を見れば先生のレベルがわかる。多くの美術品を収集する先生ならば、美術館へ行くよりも、近くで美術工芸品を見ることができ、さらにそれを使用して茶をいただくこともできることなる。その面から考えれば、茶会を催すことには、味覚の楽しみだけではなく、美術工芸品を鑑賞することも含まれている。このように、茶会に参加することが現代社会に

しかし、筆者の観察から、現在、普段の生活においては茶道を行わないことが少なくなることが分かる。また、周りの茶道を習う人々にインタビューした結果から、普段の生活においては煎茶と番茶をよく飲み、抹茶を飲まないこと、稽古をするときと茶会、茶事の時にあまり抹茶を飲まないことがわかった。このことは、日本人にとっての茶道は休憩用なものではなく、大切な客をもてなす特別な時にしか行えない一種のもてなす儀式であることを示している。そして、茶道とは単なるお茶入れの行為ではなく、点前に要する時間も

かなり長い。さらに、必要以上の茶道具を用意しなければ、客に誠心誠意を表せない。この意味においては、おもてなしをする際の茶は亭主とお客の間をつなぐ媒体となったり、亭主の美意識、そして亭主側の長い時間を費やした稽古の結果を客の前に披露する機会となったり、さらに客が用意された道具から亭主の気持ちを読み取り、亭主の点前を通じて主客の交流を行うことも主客を繋ぐ過程の一つであると考えられる。

主客の間には茶を飲む前に言葉による交流はなく、亭主の点前で互いに交流を交わす。また、日本人を対象としたインタビューでは、茶道は客を招待するため最高なもてなすであることが伺われる。茶道における主客の交流は、言葉を交わすような交流と異なり、茶道の作法により亭主側の美意識を相手に伝わるものである、そのプロセスは亭主側の長年修業の成果を表現する場でもある。このため、長い歳月をかけた茶道の修業が非常に重要となる。それは、修練によって身につけた身体的な作法による交流が、言葉よりも以心伝心となる交流であるからである。つまり、茶という媒体により主客の“心”が通じ合うようになるわけである。茶道というおもてなしは一方的なサービスを提供することではなく、主客双方が互いに満足感を与える(あるいは持つ)ものである。その意味において、茶会は主客双方を繋ぐ一種の“通過儀礼”でもあると言える。

## V. 茶道と“統合”

現代において茶道を習うことは、日常生活と整合することであり、それは昔の茶道においても現在茶道においても変わっていない。元々、貴族階級専用のお茶は、人間関係を構築ための道具として機能をしていた。それは、現代社会においても茶道が人間関係を構築す

るための重要な機能を果たしている。すなわち、茶道は現代日本人に礼儀作法を教育するための教材として活用されている点である。例えば、元々男性専用なたしなみであったが、明治維新以後、茶道が女性の教養科目に組み込まれ始めた。現在、多くの日本人女性にとって茶道の礼儀作法を習うことは、稽古を通じた身体の訓練は、無意識的に日常生活に出てくるわけである。茶会は主客が言葉で自分の意思を伝える場ではなく、今まで修行として積み重ねた“技”や買い揃えた道具、花や露地などを通して得る美意識によって、主客相互が語り合う場なのである。

また、師匠と弟子達との絆は茶会、茶事を通して結ばれる。普段の稽古は師匠と弟子の間には上下の人間関係がある、しかし茶会、茶事の時には、師匠と弟子は同じ立場で客をおもてなし、一心で同じ目標を成功させなければならない。そのため、師匠と弟子は茶会、茶事通して一時的に“統合”になる。もちろん、この段階は空間や時間を経てから、最後に主客を“統合”させる。また、作法する側の人間は自分を“統合”することもできる。つまり茶道には、自らの稽古経験による日常生活との“統合”、主客の“統合”、および師匠と弟子の“統合”という三つの統合（一体化）が含まれていることになる。

### 1. 日常生活への“統合”

茶会は日々の稽古を経て自らから修練の結果を試す場とも言える。久松氏は「道というものはいろいろに考えられますが、茶道の場合には、一応、それを践みに行つて茶が本当にやれる道、その意味で、茶の実践法則ということになります」<sup>19</sup>と述べている。つまり、茶道は普段の稽古を実践することができるのである。久田氏は、「茶のもろもろの規範を通じて、主客の間の心的交渉の深まりを求め、一服の茶を囲んでは、主客相互に美の目を確

かめ、主客默契の全人的な了解のうえに、一会の茶事の成り立ちがみられることとなる。茶の湯の座敷が、かかる全人的な相互了解、あるいは人間探求の場となると、茶の湯の修行が、人間探求の最も端的な道と法を説く禅による修行と軌を同じくし、容易に最も親しい関係にはいることが了解されるであろう」<sup>20</sup>という。茶道は稽古するだけでなく、実践することも必要なのである。茶会は普段の稽古の実践場である。茶会を利用して普段の点前作法を試し、稽古の成果を測って、その稽古の成果を理解した上で、さらに一から稽古をすることが茶道なのである。

茶道の稽古にとって、身体を訓練することであるが、その中心となっていることが見取れる。そして、日常から分離して非日常な空間において稽古を行う、茶会、茶事を催すことは、非日常的・完璧な空間にいれば、人間の不完全なところを“発見”することにつながり、緊張感を持ちつてより効果的な稽古ができるなら、自らが新しい段階（境界）に入る（通過した）ことが可能となるのである。すなわち、茶道は日常から分離して非日常な空間に稽古することは、自己を“再発見”させ完善させる通過儀礼でもある。葛藤する世界から離れて、集中することもでき、稽古の効果も高まるだけではなく、嶋根氏が言うような「創られた空間に激しい熱狂状態に投げ込まれ、デュルケムにより、オーストラリア原住民のおこなう儀式と儀礼、中でも葬礼や儀礼が、結果的には社会成員の宗教的感情高揚させている」<sup>21</sup>というような、稽古の前と稽古の後の変化が、その儀礼のプロセスに現れる。

嶋根氏が取り上げたデュルケム氏により「集合的沸騰」という言葉は、儀礼がもたらす非日常性が社会統合という潜在的な機能を持っていることを示唆するものである。それは、通常の時間と空間から一旦分離され、特

別な時間、空間を通過した後、通常の時間、空間に再び統合されていくことである。茶道における通過は、時間と空間の切り替えることである。ファン・ヘネップを取り巻く社会そのものも、通過儀礼の間には通常に時間とは異なる儀礼的な時間、つまり、非日常な空間を経験するということになる。日常から分離することは自己を再発見するであり、そして理想な自分になることでもある。

## 2. 主客の“統合”

茶道の点前は、主に茶会と茶事を催すときに行うものである。筆者の観察では、また、周りに茶道を習い人に尋ねることにより、日常生活の中では点前することがほぼない。自らから茶室に入って茶を点て飲むことは少ないことが伺われる。茶道の先生の御宅に伺う時にも、わざわざ茶室に入って点前をいただくことがなく、家庭用の茶道具を使って、簡単に茶を点てて飲むことになる。普通の家庭にはコーヒー、煎茶などを出すことは一般的になっている。

そして、筆者の観察から、茶道の点前は茶会と茶事の時の“おもてなし”となるのが分かる。ということは、茶会には一定の時間と場所を作って、客を呼んで、茶道具の準備や美術品など展示に多くの時間を費やして、非日常な空間を作り出し、客の目の前に点前を披露する茶会を通して、主客を結ぶ懸け橋となるプロセスは茶道の思想なのかと考えられるからである。林屋氏が『茶会と点前』において「点前すなわち茶を点てるということは、人間関係と精神的な内容と芸術的意義との三点をふくめ、それを表現しうるものとして、茶道の「道」たるゆえんがあるから、その点前におのずからいろいろな法がつくられてあることは当然である」<sup>22</sup>と述べている。岡倉氏は「茶室は、索漠としたに日々の暮らしに潤いをもたらすオアシスであり、そこに

会した旅人たちは、と共に、芸術鑑賞の泉を分かち合って疲れを癒すのである」<sup>23</sup>と述べている。さらに岡倉氏は、「茶という飲み物が昇華されて、純粹と洗練に対する崇拜の念を具体化する、目に見える形式となったのであり、その機会に応じて主人と客が集い、この世の究極の至福を共に創り出すという神聖な役割を果たすことになる」<sup>24</sup>ともいう。

このように、茶会は通過儀礼の視点から見れば、再統合の段階に当てられる。つまり、亭主が用意された茶道具を拝見してから、茶室に入って点前をいただき、その間に亭主の点前されることで主客互いに無言な交流ができる。続いて、主客に茶道具について始めて語り、茶室を用意した時の思いや、美術品の取り合わせなどを通してコミュニケーションをとって、主客が互いに美に対する交流を行われ、主客が美術品に対する美意識を交わすことができるのである。

このような過程は亭主の立場から見ると、茶道の点前は繰り返しの中から合理的な、美しい動きが生まれることが一番のおもてなしとなる。客の立場から見ると、亭主が用意した茶道具から亭主の美意識を理解して、亭主の所作から長年の稽古による成果を読み取る。無言の観察とそれぞれの美に対する考えた方で交流によって、互いにより深く人間的交流ができるようになる。佐々木氏がいうように「主と客が、茶によって文藝を、美術を、工藝を味ひ、人生の樂事たる飲食を共々にして、お互いの生活を美しく楽しくするものである」<sup>25</sup>、主客は茶道具あるいは互いの所作を通じて、心の奥にたどり着き、深く触れ合うのである。久田氏は、「常に茶時あっても、亭主は客を心の底からうやまい、名人の茶人を迎える心構えであるべきだし、それに応ずる客においてもまた、露地にはいつてから茶事の終わるまで、世事の雑談などを排して、一生にただ一度の茶事と心得、亭主を敬畏す

べきものと教えられてきた。一期一会の茶の心が説かれるとき、そこには、主客協同の和敬の心に貫かれ、主客ともに踏むべき厳しい細目や式法が予想されるのである」<sup>26</sup>という。いうまでもなく、茶会は日本社会にとって人間関係を構築するため重要な役割を果たしている。

### 3. 師匠と弟子の統合

茶会で1碗の茶を勧めたいばかりに、茶会にあつては茶席の手入れ、茶室、露地の掃除、掛物を選び、茶道具の取り合わせ、季節に合わせて茶花などどちらでも亭主の心持ち、態度を表すことになる。もちろんこれは、亭主一人では済ませるものではなく、茶会は亭主と弟子の合作とも言える。茶会の準備段階から、茶会の本番まで、水屋の仕事を担当し、亭主の代わりに点前をすることなど、亭主と弟子たちの協力で、客に一期一会の会を提供する。そのため茶会は、主客の“統合”であり、師匠と弟子の“統合”でもある。

茶道の仕組みから見ると、茶道は家元制度という組織である。非血縁成員を取り込み、擬制的な父子関係となり、情報を伝達するという形である。親から子へ、孫へ、師匠から弟子へと、新しい情報を加えたり、旧情報を削除したりという編集、加工が行われる。つまり、師匠と弟子の関係は、茶会の催すきっかけで、互に絆を形成して擬制的な父子関係となることである。日々の稽古の場は、師匠と弟子は上下関係であり、弟子は師匠から指導を受けている立場にある。茶会の場合には、師匠と弟子は協力関係となる。互に心を一にしなければ、茶会を成功させることはできない。茶会を催すことを通して師匠と弟子の“統合”され、師匠と弟子の関係は、より深い絆で結ばれるようになる。

さらに、茶会で客を前に点前をすることが、経験と試行の積み重ねとなり、最も効果的で

自然な形を見出す場となる。いわば、茶会は客にとって試みの場であるが、それは亭主にとっても同じことである。茶道は稽古することから茶会に参加して、点前を行うまでの一連の流れを経て、人間として“生”から“熟”に至る儀礼とも言える。茶道の点前の技の側面、人間としての心理の状態、精神の側面も含めている。毎回の稽古した自分、茶会を経た後の自分は、その稽古の経験より、さらに、“純”なる非日常空間で再発見した自分は、それ前よりも成長した“熟”した状態の自分である。茶道を通じて日常空間と非日常空間、“今日”の自分と“昨日”の自分を通過していることを繰り返している。そして人間の不完全さを受けていれて、その不完全さを毎回の稽古や、茶会などで乗り越え、自分を完全に近づけさせる“通過儀礼”である。その成果として、日常生活における、ものの考え方、持ち方を変化させて人間的に成長していくのである。

## VI. おわり

以上が述べているように、「通過儀礼」という理論から茶道を分析してみると、茶道は非日常的な性格をもつことが分かった。しかし、そこには非日常性だけではなかった、すなわち、非日常空間で非日常的に稽古を繰り返す茶道の最終的な目的は、日常生活との整合というところにあると考えられる。日本の茶道は稽古を通して、日常空間から離れ非日常空間に入り、礼儀作法を繰り返し行うことにより、日常空間において自然的に所作が身につくことが特徴である。このため、現代日本人にとって、茶道を習うことは、日常の礼儀作法を身につけるためのものとなっている。また茶会は、客が露地に“停止”して、寄り付き“待ち”，なか潜りに“通過”して、茶室において主客が出会い、茶道の点前で“統



合”（一体化）する場である。その茶会が、主客、および師匠と弟子との一体化的な人間関係を構築する重要な役割を果たす空間であることがわかった。茶道が現代日本人にとって継承し守るべき文化として代々に伝わってきた背景であろう。

岡倉は「茶の湯は、茶花、絵などをモチーフとして織り成される即興劇である。部屋の色調を乱すような色、動作のリズムを損なうような音、調和を壊すような仕草、あたりの統一を破るような言葉といったものは一切なく、すべての動きは単純かつ自然になされる一茶の湯の目指したのはこのようなものである」<sup>27</sup>と述べている。茶道は日常空間から離れて、非日常空間を通過して、その通過過程で自らから再発見をして、自分を完全近づけさせていく。「純」な空間こそ、動作を一つずつしっかり動き、完璧にさせていく過程を通過する。茶室で繰り返し行う動作、礼儀、作法などを自然に日常生活と統合することができたことは、稽古という日常的な活動により茶道を日常的空間と統合することが可能となったからである。

本考察と通して、茶道が現代日本社会において重要な役割を担い、人間関係の側面、個人な自己管理の側面、そして日本社会において必要な礼儀作法として、重要な位置付にあることがわかった。茶道という交流によって、主客、師弟の互いに投げっては受け取り、また投げ返す、その稽古、茶会時間の中に、日本特有なコミュニケーションの回路が形成されているのである。それは茶道を習い続けている理由だと考えられる。

#### 脚注\*

<sup>1</sup> 愛知大学中国研究科博士課程に在籍。

本稿は修正中に愛知大学中国研究科高明潔教授の指導を頂き、中国学研究センター (ICCS) 研究員の椎名一雄氏による日本語をチェックして頂き、ここで感謝の意を申します。

<sup>2</sup> 谷川徹三『茶の美学』淡交社、1977年187頁

<sup>3</sup> ファン・ヘネップ著、綾部恒雄・綾部裕子訳『通過儀礼』岩波書店、2012年14頁

<sup>4</sup> ファン・ヘネップ著、綾部恒雄・綾部裕子訳『通過儀礼』岩波書店、2012年14頁

<sup>5</sup> ファン・ヘネップ著、綾部恒雄・綾部裕子訳『通過儀礼』岩波書店、2012年23頁

<sup>6</sup> 熊倉功夫『緑茶文化と日本人』ぎょうせい、1999年109頁

<sup>7</sup> 堀内宗心『基本のけいこー「表千家流」』世界文化社、2001年4頁

<sup>8</sup> 南谷直利・北野与一『「稽古」及び「練習」の語誌的研究』北陸大学紀要第26号、2002年255頁

<sup>9</sup> 山田忠雄『新明解国語辞典』全面改訂第6版、三省堂、434頁

<sup>10</sup> 諸橋轍次『大漢和辞書』巻8、修訂版第8刷、大修館書店、1988年611頁

<sup>11</sup> 白川静『字通』初版第1刷、平凡社、1996年408頁

<sup>12</sup> 南谷直利・北野与一『「稽古」及び「練習」の語誌的研究』北陸大学紀要第26号、2002年255頁

<sup>13</sup> 堀内宗心『基本のけいこー「表千家流」』世界文化社、2001年4頁

<sup>14</sup> 倉沢行洋・井伊正弘『一期一会』燈影撰書、1988年15頁

<sup>15</sup> 井口海仙『茶道入門～作法と心得』社会思想社、1969年25頁

<sup>16</sup> 田中仙翁『茶の美学』講談社学術文庫、1996年29頁

<sup>17</sup> 井口海仙著『茶道入門-作法と心得』社会思想社、1969年25頁

<sup>18</sup> 嶋根克己・藤村正之『非日常を生み出す文化装置』北樹出版、2001年50頁

<sup>19</sup> 久松真一『茶道の哲学』講談社学術文庫、1987

- 年 197 頁
- <sup>20</sup> 久田宗也『茶会と点前』角川書店, 1964 年 156 頁
- <sup>21</sup> 嶋根克己・藤村正之『非日常を生み出す文化装置』北樹出版, 2001 年 25 頁
- <sup>22</sup> 林屋辰三郎『図説 茶道大系-茶会と点前 3』角川書店, 1964 年 128 頁
- <sup>23</sup> 岡倉天心『新訳茶の本』角川書店, 2005 年 50-51 頁
- <sup>24</sup> 岡倉天心『新訳茶の本』角川書店, 2005 年 50-51 頁
- <sup>25</sup> 佐々木三味『お茶と主と客』京都晃文社, 1949 年 11 頁
- <sup>26</sup> 久田宗也『茶会と点前』角川書店, 1964 年 154 頁
- <sup>27</sup> 岡倉天心『新訳茶の本』角川書店, 2005 年 50 頁

- [13] 堀内宗心『基本のけいこー「表千家流」』世界文化社, 2001
- [14] 山田忠雄『新明解国語辞典』全面改訂第 6 版, 三省堂
- [15] 白川静『字通』初版第 1 刷, 平凡社, 1996

\*参考文献

- [1] 井口海仙『茶道入門～作法と心得』社会思想社, 1969
- [2] 岡倉天心『新訳茶の本』角川書店, 2005
- [3] 倉沢行洋・井伊正弘『一期一会』燈影撰書, 1988
- [4] 熊倉功夫『緑茶文化と日本人』ぎょうせい, 1999
- [5] 久田宗也『茶会と点前』角川書店, 1964
- [6] 久松真一『茶道の哲学』講談社学術文庫, 1987
- [7] 田中仙翁『茶の美学』講談社学術文庫, 1996
- [8] 南谷直利・北野与一『「稽古」及び「練習」の語誌的研究』北陸大学紀要第 26 期, 2002
- [9] 嶋根克己・藤村正之『非日常を生み出す文化装置』北樹出版, 2001
- [10] 諸橋轍次『大漢和辞書』巻 8, 修訂版第 8 刷, 大修館書店, 1988
- [11] 林屋辰三郎『図説 茶道大系-茶会と点前 3』角川書店, 1964
- [12] ファン・ヘネップ, 綾部恒雄・綾部裕子 訳『通過儀礼』岩波書店, 2012